

# 宗教的寛容への一つの視点

石神 豊

## 1

宗教的寛容の問題は、歴史的にはとりわけキリスト教的世界において問題とされてきた。

ユダヤ教から発したキリスト教は、その当初から異教的文化あるいは多民族の問題を抱えていた。ローマ世界で国教となった後も、異文化や異なる伝統との軋轢はたえずキリスト教を脅かした。カトリック教会が独占的地位を占めるようになり、その排他的權威の確立が急がれた。そこに教義的權威とともに、位階の權威化が図られ、教皇の絶対性が主張されたのであった。

それとともに、キリスト教の歴史が非寛容の歴史と化していった。教会の外部には「異教」、内部には「異端」を抱え、教会はそれらへの正統性・優位性をたえず保持しなければならなかったのである。しかし、教会は結局、暴力的な仕方ではこれを保持することができなかつたのである。異教徒への迫害、異端弾圧へとむかうのであるが、こうした排他的傾向はつい最近まで当然のものとしてあつたといつてよい。

宗教が排他的な側面をもつということは、理解できないこともない。それは自己の教義や信仰への確信の裏返しとみられるからである。しかし、そうした教義的排他性あるいは信仰的確信と、自分の信仰以外のものをすべて否定・抹殺しようという暴力的排他性とは性質がまったく異なる。後者の態度は、有無をいわせない態度であり、相手が同じ人間であることさえも否定しようとする態度である。

このことが強く意識され、他宗教への融和的態度を表明するにいたつたのは20世紀半ばを過ぎてからである。1960年代に開かれたカトリックの第二バチカン公会議において「諸宗教に対する新しい態度」が公式に打ち出された。これは第二次大戦後、世界全体が国際化されてきたこととあいまって、それまでの排他的姿勢を改め、相互理解、

相互尊重を宣言したものである。その後、キリスト教側から積極的に他宗教との対話が行われるようになった。

## 2

すでにルネサンス期において、人文主義者たちは宗教的理由から人間を差別することの愚かしさを指摘していた。差別する側のほうにこそ問題が多いという彼らの指摘は、まったく正しいものであった。しかし、そうした人文主義者の努力にも関わらず、実際の世界では依然として対立、闘争が繰り返されていったのである。寛容の問題が具体的な問題として意識されてきたのは、16世紀以降、プロテスタント諸派が生じてからである。

スイスの宗教改革者ジャン・カルヴァン(Jean Calvin, 1509-1564)は、人文主義的教養をつんだ人物であり、寛容を説いてもいた。しかし、旧教会によりフランスを追われジュネーブへ移り住み、新教会を確立しようとしたときから、彼は反対勢力を容赦なく粛正し始めた。自分の理想通りの神政一致の都市国家を築こうとする彼の〈使命感〉は、自分に反対する多くの人々を投獄し、また死刑に処したのであった。

このような中、初めはカルヴァンの考えに共鳴し、彼と共に新教会の建設に力を尽くしたカステリオン(Sébastien Castellion, 1515-1563)という人物がいた。彼はあまりのカルヴァンの激しい粛正に批判的になっていく。カルヴァンによって追放されバーゼルへ移り住んだ彼は、『異端者論・これを迫害断罪すべきか』(1553)を著した。

カステリオンは、この本の中で、「異端」というレッテルによって、追放とか死刑というような政治的な刑罰を下すべきではないことを力説する。迫害するものもまた迫害されるもの同様、誤りを犯すことがありうる。異端者とは意見が一致しないものでしかない。他方からみれば、迫害するもののほうが異端者なのである。大切なことは根本的な精神(ここではキリスト教の本質)であり、お互いに異端呼ばわりし、迫害するのは愚劣な行為である。次のようにカステリオンは述べる。

「貨幣が黄金でなければ、ここで通用しても、他のところでは通用しないであろう。しかし、真の黄金の貨幣ならば、それにどんな刻印がうたれていようとも、あらゆるところで通用するであろう」(渡辺一夫訳)

このカステリオンの言葉は、宗教的寛容の精神を語っている。この精神は、後にレッシングが語った精神でもある。

ドイツとフランスの宗教戦争はますます熾烈をきわめていく。1572年の「聖バルテルミーの大虐殺」は、パリその他の都市で大量の新教徒が殺されるという陰惨な事件であった。フランスのユマニストであるモンテーニュ(Montaigne, 1533-1592)は、『エッセー』のなかでその愚かしさを揶揄してみせた。

「キリスト教徒は、神聖で崇高な教説を信じているというが、それは口先でしかない。……その証拠をみたいとおっしゃるなら、われわれの品行をマホメット教徒や異教徒のそれとくらべてみられるがよい。常にわれわれのほうが彼らに劣っているから。」  
「われわれは宗教をわれわれの手でいじくり回して、まるで蠟細工でもするように、あんなにまっすぐで堅固な雛形から、あんなにたくさんの違った形をつくりだしているのではないだろうか。このことが今日のフランスほど明らかにみられる時代があったらどうか。」(『エッセー』第2巻第12章、岩波文庫)

非寛容はどこから生じるのか。宗教の中にある非合理的な面から、そうした非寛容が生じるのだという見方がある。17世紀後半から始まった啓蒙主義の潮流のなか、理性主義の立場に立って、宗教の非合理的な面を批判した人々がいた。彼らは、神や奇跡を合理的に解釈しようとしたり、倫理道徳によって置き換えようとした。こうした試みはいかにも近代的といえる試みであるが、しかし、これによって問題がなくなるものではない。

### 3

イギリスのロック(John Locke, 1632-1704)も、啓蒙主義者ではあるが、彼は、宗教が「心の内側の事柄」であり、「完全な納得」こそがその力であるという、宗教に対する意見をもっていた。そして、いかなる「外的な力」によっても、そうした「内なるもの」を強制することはできないと主張した。

彼は、宗教を人間の内なる事柄とし、外的な事柄とはっきり区別することで、それまでの政治と宗教の癒着からくる悲惨さを避けようとしたのである。彼は『寛容に関する書簡』(1689)で、政教分離をはっきりとうたっている。

「いまや、為政者のすべての権限は、社会的なことがらにのみ及ぶにすぎないということ。政治的な権力や支配は、これらのことがらを押し進めるという配慮だけに限定され、制約されるということ。そして、どのような仕方でも魂の救済までは手を伸ばしえない、また伸ばすべきではないということ。」(生松敬三訳、世界の名著27)

このロックが提唱した政教分離の原則は、現代ではおおかたの賛同を得、イスラム圏を除く諸国の憲法にも反映されているのであるが、当時としては刮目すべき卓見であったといえよう。

宗教は「内なる事柄」として、それ自体尊重されるべきである。政治が関与するものは、あくまで「外なる事柄」に限定すべきであるというこの主張には、宗教者に対する警鐘と同時に、政治家に対する警鐘の双方が含意されている。宗教者は権力を持つことで、あるいは権力に保護されることで自己の保身をはかる傾向がある。しかし、これは宗教自体の腐敗を招くことになる。また、政治家にとっては、宗教は人心を支配する

上で恰好の材料である。しかし、これは実際のところ都合の悪い宗教を迫害するという  
ことになり、その結果は歴史が明らかに示すとおりである。政治家と宗教家の双方にと  
って、この相互結合への誘惑は強いものであるが、この誘惑にうち勝ってこそ寛容が成  
立するというのが、ロックの主張であった。

宗教の「内なる力」とは、自律的な力である。寛容の精神とは、たんに何でも認める  
というような緩慢な寛大さではない。寛容の精神はそれ自体、強靱な自律の精神でもあ  
る。この点、ロックにつづいてフランスのヴォルテール(Voltaire, 1694-1778)は、真の寛  
容の精神を説く。

4

ヴォルテールは、「私人としては寛容と思われる人が、なぜ公人となると非寛容になる  
のか」と問う。それはちょうどあのカルヴァンが陥った姿であり、また多くの実例が示  
すところの姿である。彼はこう喝破する。

「それは、彼らの利害が彼らの神であり、彼らは自分たちの崇拜するこの怪物のため  
に一切を犠牲にするからである。」(ヴォルテール『哲学辞典』の「寛容」の項、岩波文  
庫)

利害は強力な作用力をもつ。自律的でない人は、結局のところこの利害に左右される  
のである。真の寛容を説く人は、利害にうち勝つ強靱な精神をもたねばならない。彼自  
身、この精神を実際に示してみせた。それはいわゆる「カラス事件」を通してであった。

「カラス事件」とは、大要次のような事件であった。

1761年、南フランスのジャン・カラスの家で長男が不慮の死を遂げるという事  
件があった。カラス一家はプロテスタントであったが、じつはこのとき長男がカトリ  
ックへ改宗をしようとしていた矢先であったことから、あらぬ方向へと事件が展開す  
る。市当局、カトリック教会、そして大多数の市民(カトリック教徒)は、カトリッ  
クへ改宗しようとした長男を、プロテスタントであるカラス一家が殺害したのだと推  
測した。つまり、十分な証拠がなかったのに関わらず、(プロテスタント憎し)との  
感情から、カラス一家を肉親殺しの犯人に仕立て上げたのであった。この理不尽さに、  
ヴォルテールは憤り、ペンの力をもって精力的に、その裁判の不十分さを主張し、世  
論の良識を喚起した。その結果、すでにジャン・カラスは死刑になってはいたが、再  
審によって無罪を勝ち取り、汚名を晴らすことに成功したのである。

ヴォルテールのこの戦いは、たんに冤罪をはらしたという意義にとどまらない。むしろ、  
党派的な誤った情熱からくるところの偏見や狂信に対する戦いであったところに大き  
な意義がある。信仰が偏見や狂信を生み出すのは、信仰の自律性が見失われていると  
きである。良識はこの自律から生まれてくる。したがって良識の喚起とは、とりもなお

さず個々の人々の信仰の自律性を尊重することにほかならない。この点、ヴォルテールの立場は、カントの道徳的宗教の立場と通じている。

## 5

カント倫理学の核心は、自律の精神にある。自律とは自己立法、つまり人間は自らに自らの法則を与えるということであり、自由であるがゆえに自己責任をもつのである。それをカントは「良心の法廷」という。道徳はまさにこの理性の自律から生まれてくるものである。宗教もまたこの自律的道徳を含まなければならない、つまり道徳的宗教こそ真の宗教の条件だとしたのである。自律性をもった人間こそ、「成人」といえる。もたない人間は「未成年」である。啓蒙とは、この「未成年状態」を脱すること、つまり各自が自律的人間になることであるというのが、カントの主張である。

現代でも、「啓蒙」というと、すべてを合理性のもとに見る能力であり、しかもそうするように強制するような力であるかのように語られる。しかし、この理解はカントのいう啓蒙とはまったくかけ離れている。真の啓蒙とは、カントが『啓蒙とは何か』のなかで、「あえて賢くあれ!」「自分自身の知性を用いる勇気をもて!」と叫んだように、人間の自律的精神の確立にある。

## 6

この啓蒙の意義を現代において強調したのは、ドイツの哲学者エルンスト・カッシーラー(Ernst Cassirer, 1874-1945)である。彼は、そうした精神をもって宗教的寛容を示した人物として、レッシング(G. E. Lessing, 1729-1781)をあげている。

レッシングは著名な戯曲をいくつか残しているが、その中に『賢者ナータン』という戯曲がある。ここでは宗教的寛容が主題とされ、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教という三つの宗教がどのように相互に対していくべきかを、物語の形で語っている。この戯曲のなかでユダヤの賢者ナータンが語る「三つの指輪」の話は、印象深い。

……それを持った人は、人々に好かれ、自分も幸せになれるという不思議な指輪があった。

この指輪をもっていた男は、亡くなるときに、指輪をもっとも愛する息子に与えようとした。しかし息子は三人あり、彼は困った末に、二つのレプリカを作り、それぞれ三人に指輪を与えることとした。このレプリカはあまりにも本物そっくりであり、三つのうち、どれが本物か見分けがつかない。父親の死後、息子たちは自分のものこそ本物だと主張し、自分こそもっとも父親に愛されていたのだと主張した。この争いは、ついに裁判に持ち込まれることになった。

裁判官はこう裁定した。「三人ともそれぞれ自分のものが本物だとしっかり思いこむがよい。そして人々を愛し、よい行いをすることで、人々に好かれ、また幸せにも

なれるだろう。その時こそ、どれが本物の指輪かが証明されるだろう。」……

(参照：『レッシング名作集』白水社)

三つの指輪とはもちろん、上に述べた三つの宗教である。そして、それぞれの宗教が排他的に争うのでなく、むしろそれぞれが切磋琢磨し、よい実証を示すことにこそ宗教の争いの意味があるとするのが、レッシングの主張である。カッシーラーはこう述べている。

「レッシングの指輪の物語は、宗教の究極的な真理は、外的な立証によって示されるのではなく、内的な確信によってのみ立証されうるということを示している。……宗教の宗教としての存在は、それが何をなすのかということにのみあり、その重要な本性は心情と行為による以外には実現されない。ここにこそ、あらゆる真の宗教における試金石がある」(『啓蒙主義の哲学』紀伊国屋書店)

カッシーラーがここで述べるように、宗教は内的確信をその魂としているのであり、その確信を行為において示すしかない。つまり、よい実証を自ら示しうるかどうかには宗教の真価がかかっているのである。

こうした宗教観は、自律的信仰に着目した宗教観であり、また人間的な宗教観であるといえよう。つまり、宗教とは他のためではない、まさに人間のためにある。それゆえそうした人間的意味を示すべきである。この立場から、他の宗教との関係を考えるとき、人間的競合、つまり「善の競争」をしていくべきだということになる。

宗教的寛容は人間理解の観点なくしてありえない。さらにいえば、個々の人間を尊重し、生命を尊しとする立場こそが必要である。そうした立場から諸宗教をみるとき、それはけっして解決できない〈対立〉ではない。むしろこの多様さを積極的に生かす方途さえ見いだしうる希望があると思われる。時間をかけることを厭わず、地道に対話の道を進んでいくべきだというのが、歴史から学ぶことのできる一つの知恵ではないだろうか。

(いしがみ ゆたか・研究員/創価大学教授)